

母親・父親の視点から見た現代家庭の実相

—— 子ども・母親・父親の関わりと非行問題 ——

馬場 久志*・原田 裕子**・坂西 友秀*

キーワード: 子育て、家庭、母親、父親、相談

問題と目的

子育てと家庭をめぐる問題状況

現在社会は、子どもの育ちにくい社会であるといわれる。効率と利潤の追求が生活の隅々まで支配し、絶えざる競争の中で子どもも大人も生活している。大人社会の優勝劣敗的な価値観にさらされた結果として子どもたちの間に生じている他者への防衛的同調と競争の強い思いは、もって行き場のないほどのストレスをもたらしている。だがそんな子どもたちに心からの安心と憩いを与えるほどに大人たちの余裕はなく、子どもは、自分たちの生活を非現実的世界に重ねていくことで気持ちを支えている。現代社会においては、さまざまな電子情報媒体が開発されて非現実世界である疑似空間との親和性を高めてきたし、金銭を媒介として子どもにとっての非現実世界である大人世界に出入りすることも可能となっている。だが、そうした非現実世界にも生きようとする子どもたちの行動は、従来の一般的な家庭規範には収まらない。親たちはこれを自分たちのしつけの失敗であると考えるのだが、そう考えたところで親の力で統制できるという性質のものではない。そのため親が子育ての上で抱える問題は、さまざまに厳

しい。

こうした子育ての問題は、多くの場合親が、しかも特に母親が抱え込んでしまいがちである。そのため、周囲の知るところとなったときには深刻で修復困難な事態に陥っていることもある。2004年夏に、埼玉県熊谷市で県内の中学生が金属バットで男性を襲うという夜間路上強盗事件が発生した。そのほかにも、中学生や高校生が人を殺傷するという事件が日本の各地で起きている。このような事件の起きるたびに、なぜもっと早くその子どもに適切な働きかけが出来なかったのか、親はなぜもっと早く誰かに相談できなかったのかということが言われる。しかしそれが難しいというのが現状である。子どもの気がかりな行動があっても、それを家庭内で解消しなければという思いから逃れられないのが、多くの親の実情なのではないだろうか。

家庭の責任を強調する考え方も強く残る一方で、少子化問題を背景にして、社会が子育てを支えるという考え方もあらためて広がりつつあるが、子育ての上での困難を家庭がすべて負ってしまう構図が変わらなければ、社会の子育て支援は実現しない。親たちが打ち明けて相談できない人間関係や、家庭任せになっている地域の暗黙の関係があるのだろうか。このことの解明が必要である。

さらに、子も親も周囲の支えや相互の支えが

* 埼玉大学教育学部教育心理カウンセリング講座

** 子どもと家庭研究会

得られるような環境づくり・居場所づくりの条件は何かを探ることが、求められる。

そこで本研究の第1の目的は、子どもの生活の問題や子育ての困難に対する親の認識をとらえることである。特に思春期前後の子どもをもつ父親と母親が、家庭の実態をどうとらえ、子どものどのような行動を重大視しているかを探る。また第2の目的は、親が他者に相談することや夫婦で問題を共有することの難しさを分析することである。さらに第3の目的は、相談にまでは至らない潜在的な相談動機・相談内容を掘り起こすことである。

方 法

研究1・研究2 質問紙調査

上記の第1および第2の目的のために、本研究では思春期前後の子どもをもつ親を対象とした質問紙調査を実施した。

調査内容

調査項目には、次の観点についてそれぞれ複数の質問を設定した。

① 家庭での親子の関わり

…食事と会話を手がかりとした。

② 子どもと親の葛藤

…子どもの行動や持ち物などについて、子どもの嗜好と親の規制が葛藤状況を引き起こしそうな場面を設けた。

③ 子どもの状態や行動への不安

…報道される少年事件をわが子に置き換えてみるという漠然とした不安や、不安をいだきそうな子どもの具体的行動場面を設定した。

④ 子育ての自信あるいは不安

…根本的な信頼の有無や手応えを問題とした。

⑤ 子育てについての相談関係

…相談の相手、相談手段などのリストを設けた。

⑥ 子育てをめぐる夫婦の関係

…夫婦での相談状況を項目として設けた。

具体的な質問項目は、結果の因子分析表のところに一覧が記載されている。

また本研究の契機の一つである埼玉県内外の少年事件を取り上げ、その認知度と自由記述による所感を求めた。

調査対象と調査手続き

調査対象は、埼玉県内の小学校1校の5年生と中学校1校の2年生に在籍する児童・生徒の保護者とし、学級担任に依頼して質問紙を児童・生徒を通じて配付した。父母が回答者となることを想定して、質問紙は2人分ずつを配付した。回答は無記名とし、家庭で記入し、封入して学校を経ず直接著者らの研究室に郵送してもらって回収した。小中学校合わせて216名分を配付したが、回収数は107名分であった。回答者の内訳は、母親66名、父親35名、その他及び不明が6名であった。両親からの回答は35組あった。父母回答者の年齢は32歳から59歳の範囲であり、中央値はおおよそ43歳であった。(表1)

表1 回答者の年齢分布

| 年齢(歳) | 人数(人) |
|-------|-------|
| 30-34 | 3 |
| 35-39 | 17 |
| 40-44 | 40 |
| 45-49 | 23 |
| 50-54 | 9 |
| 55-59 | 6 |
| 60-64 | 1 |
| 無回答等 | 8 |
| 合計 | 107 |

研究3 集団および個別面接による聞き取り

上記の第1および第2の目的にも関わるが、特に第3の目的のために、本研究では小集団および個別の面接による聞き取り調査を行った。

第1回聞き取り調査

埼玉県内の小学校1校に子どもが在籍する母

親9名に参加してもらい、2時間に及ぶ集団内での調査者のとのやり取りで話されたことを聞き取った。発言は録音により記録された。主に母親の視点から見た子どもの様子や子育てで悩んだり苦勞をした経験を語ってもらった。

第2回聞き取り調査

埼玉県内の中学校1校に子どもが在籍する母親11名の協力を得て、調査者1名との個別面接形式での聞き取りを行った。発言は録音により記録された。第1回と同様に、母親の視点から子どもの様子や子育ての悩みを自由に語ってもらった。(馬場久志)

研究1

「親子の人間関係」に関する母親と父親の回答の全体的傾向

目 的

研究1では、母親と父親の回答の全体的な傾向を、次の4点に焦点をあてて分析し、検討する。まず、母親と父親は、① 家庭内の親と子の人間関係や近隣の友人との人間関係をどのような視点からとらえているのか、認知された人間関係はどのようなカテゴリーに分類できるのか、これらの点を探索的に明らかにする(親子の人間関係項目の分析)。家庭の内外における人間関係には、質的に異なるいろいろな面がある。家庭内の人間関係を見てみよう。夫婦関係に関わるものもあれば、親と子どもの関係に関するものもある。さらに、夫婦の関係にも、二人の間の日常会話の満足度に関するものもあれば、子どもの養育上の悩みに関するものもあるかもしれない。子どもとの関係において、母親と父親がもっとも重視するのは、子どもの勉学上の問題、交友関係上の問題であるかもしれないし、インターネットやメール利用上の問題であるかもしれない。次に、①の視点に関わる要因・カテゴリーを明らかにした後で、② 各要因の認知には、母親と父親の間に違いがあるか否かを検討する(親子の人間関係)。仮に①で夫婦間のコミュニケーションのとらえ方や親子間の葛

藤に関連する要因が抽出されたとしよう。これらの要因の評定値を母親と父親で比較した場合、両者の間に差異が生じるかもしれない。なぜなら、一般に家庭生活への関与が弱く、家事への参加率が低い父親は(雇用職業総合研究所、1987)、母親より夫婦間のコミュニケーションや親子間の葛藤に関心が薄く、母親よりも家族及び親子の関係の現状を楽観的にとらえている可能性があるからだ。さらに、③ 子どもに関して困りごとや悩みが生じたとき、どのような方法・媒体(電話・メール・直接面会)を通じて人に相談するのか、夫婦間に利用する方法・媒体に違いがあるか否かを吟味する(交信手段の利用)。また、利用する媒体は、親子関係・子育て仲間の人間関係の善し悪し、親子間の葛藤等の要因によってどの程度強く影響されるのであろうか。手軽さが重宝される「電子メール」は、「電話」や「直接的対面」よりも、どのような事態においても困りごとや悩みを相談する媒体として利用されやすいのであろうか。こうした点を考慮しながら、④①で抽出した因子と各交信手段(メール・電話・直接面会)の利用との関わりの強さを明らかにする(交信手段の利用と「人間関係」因子の係わり)。最後に、⑤「熊谷事件」が母親と父親にどの程度知られているのかを明らかにする(熊谷事件の認知について)。

方 法

論文全体の調査方法で記述したように、埼玉県内の公立小学校1校及び中学校1校の父母を対象に調査を実施した。質問紙は、各学校で開催された父母会の際に封筒に入れて依頼・配布し、家に持ち帰って記入していただくよう要請した。記入した質問紙は、同封の返信用の封筒に入れて返信していただくこととした。質問紙、返信用封筒共に無記名で、調査者が記入者を特定することはできないように配慮した。

結 果

分析にあたっては、母親と父親を夫婦単位で対応させて比較しているわけではない。母親と

た項目を合計し、その合計値を項目数で除した値（平均値）を回答者個人の各因子に対する評定値とした。

主な結果 親子関係の現状認識に、母親と父親の間に違いがあるか否かを吟味するために、抽出した4因子それぞれを従属変数に、母親と父親を独立変数にした分散分析を行った。なお、子どもの数や子どもの性構成（女子だけの姉妹構成か、男子だけの兄弟構成か、男女の兄弟姉妹構成か）によって親の子ども理解と子育て仲間とのコミュニケーション、親子間の葛藤、子どもの私生活に対する親の不安・心配、子育て方針の夫婦間の一致に差異が生じる可能性があることを考慮して、両親（母・父）の他に兄弟数/兄弟姉妹の性構成も独立変数にした。いずれも被験者間要因である。以下では、既述の4因子を従属変数にして、母親・父親（2）×兄弟数（2人か3人以上か）の分散分析および母親・父親（2）×子どもの性構成（3）の分散分析を行った。なお、前者の分析では有意な効果はまったく認められなかったもので以下では言及しない。

4因子に関する各条件（母親・父親×子どもの性構成）の平均と標準偏差をまとめたものが表2であり、悩みごとや困りごとがあるときに母親と父親が、どのような交信手段を用いて人に相談するのかについて、各条件の平均と標準偏

差をまとめたものが表3である。

1 親子の人間関係

「子ども理解と子育て仲間のコミュニケーション」についての母親と父親の全体的な評定傾向をまず見てみよう（図1）。全体的には母親の評定値が、父親の評定値を上回っている。「子ども理解と子育て仲間のコミュニケーション」は、父親より母親の方が良好であると認知しているが、両者の評定は5段階評定の4.37と3.58であることから、夫婦共に概ね子どもを良く理解し、家族のコミュニケーションもあると受けとめていると考えられる。「親子間の葛藤」「子どもの私生活に関する不安」の両因子でも母親の評定値は父親の評定値より大きい（前者 母2.85、父2.14；後者 母2.05、父1.73）。いずれの因子でも父母の評定値は3.00以下で小さく、子どもとの葛藤や子どもに対する不安は両親共にそれほど大きくはないと認知している。とりわけ、子どもの私生活に対する父親の不安は1.73と小さい。

「夫婦の子育て方針一致」の因子では、結果は逆転し、父親の評定値（4.14）は母親の評定値（3.83）より大きく、父親は、夫婦間で子育て方針は一致していると認知する傾向が強い。各条件の母親と父親の評定値は4.00前後にあり、全

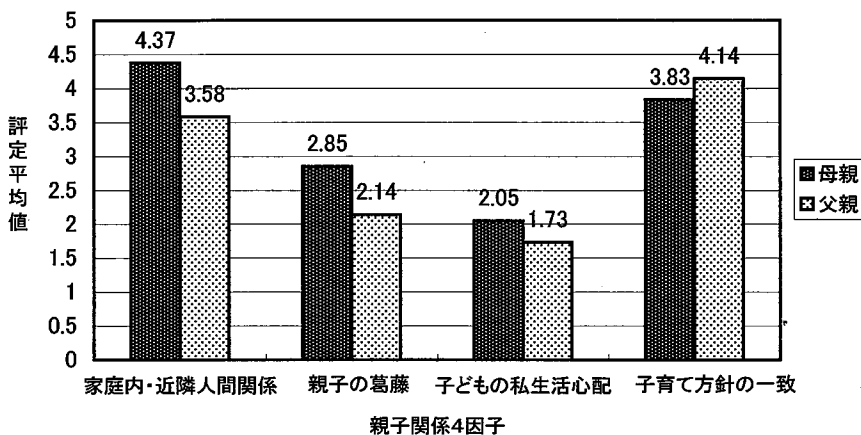


図1 母親・父親の親子関係4因子の評定平均

表3 子どもの性別構成と関わらせてみた母親・父親の家庭内・近隣の人間関係の認知

| | 女姉妹 | | | | 男兄弟 | | | | 女・男兄弟姉弟 | | | | |
|-----|-------|------|----------------|----------------|------|------|----------------|----------------|---------|------|----------------|----------------|-----------|
| | 母親 | 父親 | n ₁ | n ₂ | 母親 | 父親 | n ₁ | n ₂ | 母親 | 父親 | n ₁ | n ₂ | |
| 因子1 | 4.39 | 3.81 | 15 | 7 | 4.31 | 3.95 | 16 | 8 | 4.32 | 3.21 | 23 | 12 | a+ |
| | 0.71 | 0.86 | | | 0.81 | 0.71 | | | 0.52 | 0.63 | | | |
| 因子2 | 2.93* | 2.21 | 14 | 7 | 2.34 | 2.07 | 15 | 10 | 3.08 | 2.15 | 27 | 14 | b** |
| | 0.58 | 0.90 | | | 0.90 | 0.77 | | | 0.79 | 0.75 | | | |
| 因子3 | 1.91 | 1.47 | 13 | 8 | 1.77 | 1.96 | 15 | 11 | 2.27 | 1.69 | 27 | 13 | b+, a, b△ |
| | 0.74 | 0.20 | | | 0.73 | 0.67 | | | 0.85 | 0.59 | | | |
| 因子4 | 3.97 | 4.18 | 14 | 8 | 3.89 | 4.13 | 16 | 8 | 3.72 | 4.12 | 25 | 13 | b* |
| | 0.59 | 0.31 | | | 0.47 | 0.69 | | | 0.61 | 0.60 | | | |

(注) ** $p<0.01$, * $p<0.05$, + $p<0.1$ を表す。N1は母親の回答者数、N2は父親の回答者数を表す。

因子1: 子ども理解と子育て仲間のコミュニケーション因子; 因子2: 親子間の葛藤因子

因子3: 子どもの私生活に関する不安の因子, 因子4: 夫婦の子育て方針一致の因子

兄弟姉妹の性構成は要因a, 母親・父親は要因bとする。

表4 子どもの性別構成と関わらせてみた母親・父親の子育てに関する交信手段/熊谷バット事件既知度

| | 女姉妹 | | | | 男兄弟 | | | | 女・男兄弟姉弟 | | | | |
|----------------|------|------|----------------|----------------|------|------|----------------|----------------|---------|------|----------------|----------------|------------|
| | 母親 | 父親 | n ₁ | n ₂ | 母親 | 父親 | n ₁ | n ₂ | 母親 | 父親 | n ₁ | n ₂ | |
| 電話で相談 | 2.60 | 1.38 | 15 | 8 | 2.20 | 1.33 | 15 | 9 | 2.29 | 1.27 | 28 | 11 | b** |
| | 0.83 | 0.52 | | | 0.68 | 0.50 | | | 0.53 | 0.65 | | | |
| メールで相談 | 1.73 | 1.25 | 15 | 8 | 1.60 | 1.11 | 15 | 9 | 1.74 | 1.00 | 27 | 11 | b** |
| | 0.70 | 0.46 | | | 0.51 | 0.33 | | | 0.86 | 0.00 | | | |
| 直接会って相談 | 2.31 | 2.00 | 16 | 8 | 2.29 | 3.00 | 14 | 10 | 2.18 | 1.42 | 28 | 12 | a**, a, b+ |
| | 0.70 | 1.07 | | | 0.73 | 3.23 | | | 0.61 | 0.51 | | | |
| 熊谷市内路上事件を知っている | 1.28 | 1.88 | 16 | 8 | 1.50 | 1.45 | 16 | 11 | 1.58 | 1.85 | 26 | 13 | |
| | 0.62 | 0.83 | | | 0.63 | 0.52 | | | 0.64 | 0.80 | | | |

(注) ** $p<0.01$, * $p<0.05$, + $p<0.1$ を表す。N1は母親の回答者数、N2は父親の回答者数を表す。

兄弟姉妹の性構成は要因a, 母親・父親は要因bとする。

的に夫婦間の子育て方針は一致する傾向にある、と認知していた。

以上の結果をさらに詳細に吟味することにしよう(表3)。「子ども理解と子育て仲間のコミュニケーション」の因子について、既述の子どもの性構成(2)×母親・父親(2)の2元配置の分散分析を行った結果、子どもの性構成の主効果が有意傾向が認められた($F(2,75)=2.89$, $p<.10$)。子どもが女子のみ、男子のみの場合の方が、女子と男子両性がいる場合より、親子の全体的な関係は良好になる傾向がある。また、父親と母親の主効果が有意であった($F(1,81)=12.25$, $p<.01$)。父親より母親の方が全般的な「子ども理解と子育て仲間のコミュニケーション」は良好だと認知する傾向が強い。

「親子間の葛藤」因子の分散分析の結果、母親と父親の主効果が有意であった($F(1,81)=12.25$, $p<.01$)。父親より母親の方が、子どもとの葛藤を強く感じており、子どもともめたり、子どもの扱いに困ることを多く経験している。

「子どもの私生活に関する不安」の因子の分散分析の結果、母親と父親の主効果が有意傾向にあった($F(1,81)=2.73$, $p<.10$)。父親より母親の方が、「子どもの私生活に関する不安」が強い傾向が認められた。

「夫婦の子育て方針一致」の因子の分散分析の結果、母親と父親の主効果が有意であった($F(1,78)=4.38$, $p<.05$)。母親よりも父親の方が、子どものしつけや問題については夫婦で相談し、二人の考えは一致していると認知する傾向が有意に強い。

2 交信手段の利用

子どもに関して困りごとや悩みがあったとき、母親と父親は周囲にどのような手段を通じて相談したり話したりしているのだろうか。図2は、父親と母親の相談手段利用の現状を、全回答者についてグラフ化したものである。全体的に父親より母親の方が、友人などに相談する頻度が高くなっている。しかし、母親も父親も

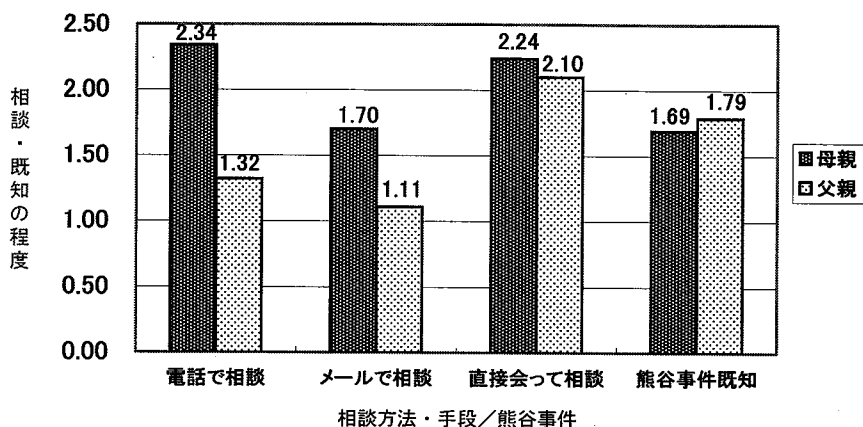


図2 媒体別にみた母親・父親の困りごと・悩みの相談/熊谷事件の既知度

評定値は、「電話」・「メール」・「直接的面会」のいずれも5段階評定の2.50以下になっていることから、父母が第三に対して行う相談そのものが少ないことがわかる。とりわけ父親は評定平均値が1.00台であり、相談頻度は極めて少なくなっている。

子どもの性構成によって母親と父親の友人への相談頻度に差異があるか否かを検討した。各条件ごとに評定平均値をまとめたものが表3である。友人との交信手段ごとの評定値を従属変数、母親・父親を独立変数にして、既述の2元配置の分散分析を行った。電話で相談する場合、父母の主効果が有意であった ($F(1,80)=48.93, p<.01$)。母親は父親より、電話で子どものこと

について友人と電話で話すことが有意に多い。メールに関しても同じように父母の主効果が有意であった ($F(1,79)=14.52, p<.01$)。母親は、父親より子どもに関する悩みを第三者と「メール」でやりとりすることが有意に多い。

直接会って相談する場合について同様の2元配置の分散分析を行った結果、子どもの性構成の主効果 ($F(2,82)=3.12, p<.05$) と父母×子どもの性構成の交互作用が、有意または有意傾向であった ($F(2,82)=2.41, p<.10$)。母親では、子どもの性構成の違いによって、子どもに関する困りごとや悩みを相談する頻度に違いがないが、父親では大きな差異が生じている。父親は、子どもが男兄弟のみの場合に、女子のみまたは

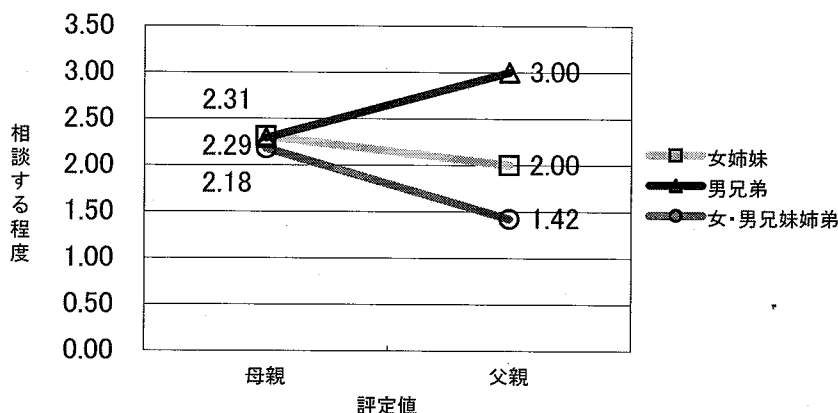


図3 子どもの性構成と父母の困りごとの相談

女子と男子混合の兄弟姉妹の性構成の場合よりも、子どもに関する困りごとや悩みを人に相談する傾向が有意に強い (図 3)。

3 交信手段の利用と「人間関係」因子の係わり

親子間の人間関係 4 因子のうちどの因子がどの交信手段の利用と関連が強いのかを検討するために、4 因子を説明変数 (独立変数) にし、「電話」、「メール」、「直接面会」それぞれ (困りごとや悩みの相談) の評定値を従属変数にして、重回帰分析を行った。電話の利用 ($R^2=.29$) についての標準偏回帰係数は、「子ども理解と子育て仲間のコミュニケーション」でのみ有意であった ($\beta=0.52, p<.001$)。困りごとや悩みの相談は、全般的に「子ども理解と子育て仲間のコミュニケーション」が良好であるほど電話を利用して行われることが示された。メールでの相談については ($R^2=.16$)、「親子間の葛藤」 ($\beta=0.37, p<.005$) と「子ども理解と子育て仲間のコミュニケーション」 ($\beta=0.33, p<.005$) の 2 因子が有意な関係をもっていた。子どもに関わる困りごとや悩みの相談では、親子間の葛藤が強いほどメールが利用されやすく、さらに「子ども理解と子育て仲間のコミュニケーション」が良好である場合に用いられやすいことがわかる。直接会って子どもについての困りごとや悩みを相談する場合には ($R^2=.14$)、「子ども理解と子育て仲間のコミュニケーション」 ($\beta=0.36, p<.001$) の良好さが強く関係している。

4 熊谷事件の認知について

熊谷事件の既知度を従属変数にして、子どもの性構成 (2) × 母親・父親 (2) の 2 元配置の分散分析を行った。その結果、有意な効果は認められなかった。各条件の評定値のレンジは、1.28 から 1.88 であり、事件についてよく知っているほどではないが、少しは知っている状態にあった。母親・父親 (2) × 既知度 (3; よく知っている・知っている・全く知らない) の χ^2 検定を行った。既知度別の人数分布は、「よく知っている」

る」 (母親 27 人、父親 14 人)、「知っている」 (母親 30 人、父親 13 人)、「知らない」 (母親 7 人、父親 7 人) であった。母親と父親の間に事件について「知っている人」と「知らない人」の割合に有意な差はない。母親の 89.06%、父親の 79.41% の人は事件について知っていた。

考 察

親子関係

本研究では、子どもと親の人間関係を中心に分析を行った。親子間の関係が、主に「子ども理解と子育て仲間のコミュニケーション」、「親子間の葛藤」、「子どもの私生活に関する不安」、「夫婦の子育て方針一致」の 4 つに大別できたことは、私たちの日常の経験からして了解しやすいものである。中でも、子どもと親の係わりに関しては、3 つの因子が抽出され、質的に異なる内容の難しさが親子の関係にあることが示唆されている点は興味深い。

思春期の子どもを目の前にして、子どもの行動が理解できず、親が悩むことは少なくない。「子どもが親の言うことをきかず、苦勞することが多い」と感じることは、どこの家庭においても日常的なことではないだろうか。また、困りごとを気軽に話題にできる第三者が身近にいるか否かは、子どもの問題を親が抱え込まないためにはとても重要なことである。「普段子どもの話をする相手は子どもを通じてつき合っている友人 (親) だ」、「普段子どもの話しや世間話をする相手は近所の友達だ」、「子育てのことで、知人や友人から相談されることがよくある」、子育て仲間とのコミュニケーションに関するこれらの項目が、親子関係を考える上で大きな役割を果たすことが確認されたことは重要である。

「子どもと言い争いになり、子どもの扱いに困ったことがある」、「子どもに言うことをきかせようとつい手が出てしまうときがある」、「子どもともめることがよくある」、「学校の先生から子どもの問題を指摘され親として自信をなくしたことがある」、「子どもが親の言うことをき

かず、苦労することが多い」、「子どもがときどき『キレ』そうになり、怖い」。これらの内容も、子どもが思春期にさしかかる頃には、多かれ少なかれほとんどの親が経験しているものではないだろうか。残念ながら、今回の調査では、こうした葛藤が親子間に生じたとき、母親と父親がどのようにして難局を切り抜けたかについてまで明らかにすることはできなかった。親子間の軋轢をどのように解決し、健全な親子関係へと修復し発展させていくのかを明らかにすることは、青少年問題を考える上でとても重要である。今後、どこ家庭でも経験すること柄として、丁寧な聞き取り調査を行うなど、親子間の葛藤の具体的な中身とその解決法を明らかにすることが課題である。

さらに、次の内容も思春期の子どもを育てるほとんどの家庭で経験するものであろう。「髪型、染髪で子どもともめることがある」、「服装のことで子どもともめることがある」、「携帯電話の利用料金で子どもともめることがある」、「子どもがインターネットでアダルトサイトを見るのではないかと心配だ」、「子どもがインターネットでトラブルに巻き込まれないか心配だ」、「子どもがゲームセンターに遊びに行くことでもめることがある」、「子どもが休日に都内に遊びに行くことでもめることがある」、「子どもがときどき『キレ』そうになり、怖い」、「子どもの帰宅が夜遅くなり、子どもともめることがある」。インターネットの利用と犯罪との関係などについては、関連する各種の調査が行われ、一般的な傾向は把握できる（社団法人日本PTA全国協議会、2004、警視庁、2005）。しかし、実際に親が、子どものインターネット利用や都内への外出、深夜帰宅などについて、家庭内でどのように対応をしているのかは明らかではない。この点も面接調査で明らかにすべき課題である。

母親と父親の養育への係わり

本調査では、父親に比べ母親の子どもの養育への関わりが強いことを示唆する結果が得られ

た。これは、他で行われている調査結果と一致する傾向である（厚生労働省大臣官房統計情報部、2004）。注意すべき点は、乳幼児の世話が母親に偏る傾向があるだけでなく、この調査で対象にした小学生や中学生に対する親の関わりにおいても、父子関係が母子関係に比して弱いことが示されたことである。さらに、子どもを育てる上で夫婦が交わすコミュニケーションの密度や、子どもに対する対処方針が夫婦間で一致している程度に関しては、母親より父親の方が密度や程度が大きいと認知する傾向が強い。これは、指摘しておくべき傾向であろう。日常の子どもとの関わりや葛藤を強く感じる母親とは対照的に、父親は夫婦で協調して子育てをしていると強く認識しているため、夫婦間にズレ・齟齬が生じる可能性が大きいからである。

子どもの問題の相談と利用媒体の違い

現在、家庭への携帯電話の普及率は90%を超えている（総務省情報通信政策局、2005）。いつでもどこでも利用できる携帯電話の利便性は高い。携帯電話のこうした利用しやすさは、親子間に困りごとや悩みが生じたときに、母親または父親が人に相談することと結びついているのであろうか。本調査の結果は、子どもの問題を親が人に相談するためには、子ども理解と子育て仲間のコミュニケーションが良好であることが重要な条件であることを示唆する（4因子を独立変数とし、各媒体による相談を従属変数にした回帰分析では、決定係数 R^2 が小さく重回帰モデルへの“あてはまり”はよくなかったが、探索的に手がかりを得るためにとり上げた）。

子ども理解と子育て仲間のコミュニケーション全体が良いことは、「電話」、「メール」、「直接的面会」による相談のいずれにおいても必要条件であった。この結果は、重要な意味をもつように思える。つまり、親子間で問題が生じ、軋轢がのつびきならない状態にまで達している場合、父母が周りとは結ぶ人間関係やコミュニケーションが、全体として良好に維持されることは稀だと考えられるからである。親子間の葛藤や

困難を抱える家庭ほど、問題を表に出すことをはばかる。人との接触や子どもに関わる会話の回避は、子育て仲間を作りにくくし、孤立する可能性を高めるかもしれない。とすれば、小・中学生をもつ親の「子育て支援」を考える場合、「子育て仲間」に基盤を求めるだけでは問題は解決しないことになる。親子関係に悩みを抱え、かつ「子育て仲間」との関係がうまく作り出せない母親・父親が、相談を受けやすくする他の手だてを工夫しなければならない。この点で「メール」は、1つの有効な媒体になる可能性を持つものかもしれない。なぜなら、子どもに関わる親の悩みが大きくなるほど、「電話」や「直接的な面会」ではなく、「メール」の利用が多くなる傾向があったからだ。ただし、前述のように子育て仲間との良好な人間関係が基本的な必要条件であるとすれば、この条件がなくても、親が子どもに関する悩みを「メール」で相談できるよう入り口の「敷居」を低くすることが欠かせない。そのためには、隣近所の耳目を気にせざるを得ない相談者に、「匿名性」を保障することが重要な条件の一つになるのかもしれない。

(坂西友秀)

研究 2

親の危機感と支援の必要性の所在

目 的

子育てをしている家庭を見ると、一般に考えられがちなことは、子どもの問題行動などが明らかなほど親は支援を求めているし、親が未熟なほど支援を求めているということであろう。だがそのように客観的な状況が支援の必要性の認知に対応しているとは限らないということが、昨今の少年事件の例や著者らの見聞するところから伺われる。ここでの分析は、子どもの行動と親の危機感との関係や、親の人生経験とかかえる困難の関係、相談と被相談の関係などを検討することにより、周囲が考える支援の必要性と親自身のかかえている困難との一種の

ずれを検出することを目的とする。

結 果

子どもの行動と親の危機感

子どものさまざまの行動は親にとって許容限度を超えるものであり、そのためこれを規制したり注意を与える親とそれを干渉と考える子どもとの間に葛藤状態が生じる。このことを本調査では「もめる」「苦労をする」「心配だ」などの表現で尋ねた。その結果、親の危機感には二つのレベルがあることが示唆された。一つは「子どもが何を考えているかわからない」「事件を聞くと自分の子どももと不安になる」「子どもの扱いに困ったことがある」「子どもともめる」「親のいうことを聞かない」「子どもがときどきキレそうに」「親に心を開いていないと感じる」の各項目に関するものである。表5のように、これらの質問への回答間には相互に強い相関関係がある。他方、「髪型で子どもともめる」「服装で子どもともめる」「アダルトサイトを見るのではないかと心配」「携帯電話の料金でもめる」「インターネットでトラブルに巻き込まれないか心配」「ゲームセンターに遊びに行くことでもめる」「休日に都内に遊びに行くことでもめる」の各項目に関するものもあり、これらの項目の回答間には相互に強い相関がある。(表5)だが前者の項目群と後者の項目群との間には、群内でみられるほどには有意な相関関係がないという特徴がある。つまり、前者の質問群に肯定回答する親たちと後者の質問群に肯定回答する親たちが別々に存在するということを意味している。前者は特定の行動や場面に限定されたものでないので、漠然的危機感と呼び、後者は具体的材料に関してのものなので、具体的危機感と呼ぶことにする。

では、漠然的危機感をいなく親と具体的危機感をいなく親とでは、子育て態度や悩みの相談傾向について違いがあるのだろうか。このことを確かめるために、上記各項目への回答を肯定の度合いに応じて6~1点で数値化し、それぞれ

表5 親の感じる危機感項目間の相関係数

| | 漠然的危機感 | | | | | | | 具体的危機感 | | | | | | |
|-----|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 4 | 5 | 6 | 8 | 21 | 22 | 32 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
| 漠然4 | 1 | .39** | .36** | .24* | .44** | .35** | .47** | .06 | .09 | .20* | .20* | .06 | .12 | .05 |
| 然5 | .39** | 1 | .32** | .28** | .29** | .25** | .37** | .05 | .23* | .29** | .21* | .19 | .15 | .13 |
| 的6 | .36** | .32** | 1 | .70** | .48** | .50** | .31** | .12 | .22* | .15 | .03 | .08 | .32** | .18 |
| 危8 | .24* | .28** | .70** | 1 | .43** | .55** | .41** | .25** | .31** | .10 | .12 | .05 | .28** | .10 |
| 機21 | .44** | .29** | .48** | .43** | 1 | .40** | .38** | .18 | .24* | .22* | .16 | .16 | .24* | .14 |
| 感22 | .35** | .25** | .50** | .55** | .40** | 1 | .34** | .20* | .23* | .15 | .26** | .00 | .35** | .24* |
| 32 | .47** | .37** | .31** | .41** | .38** | .34** | 1 | .08 | .06 | .22* | .12 | .12 | .22* | .09 |
| 具14 | .06 | .05 | .12 | .25* | .18 | .20* | .08 | 1 | .76** | .43** | .37** | .28** | .35** | .42** |
| 体15 | .09 | .23* | .22* | .31** | .24* | .23* | .06 | .76** | 1 | .35** | .43** | .23* | .32** | .31** |
| 的16 | .20* | .29** | .15 | .10 | .22* | .15 | .22* | .43** | .35** | 1 | .40** | .59** | .43** | .40** |
| 危17 | .20* | .21* | .03 | .12 | .16 | .26** | .12 | .37** | .43** | .40** | 1 | .42** | .28** | .29** |
| 機18 | .06 | .19 | .08 | .05 | .16 | .00 | .12 | .28** | .23* | .59** | .42** | 1 | .44** | .24* |
| 感19 | .12 | .15 | .32** | .28** | .24* | .35** | .22* | .35** | .32** | .43** | .28** | .43** | 1 | .47** |
| 20 | .05 | .13 | .18 | .10 | .14 | .24* | .09 | .42** | .31** | .40** | .29** | .24* | .47** | 1 |

*) $p < .05$ **) $p < .01$

表6 危機感の種別と身近な相談相手の有無の関係

子どものことで不安や心配なことがあっても身近に相談する相手がいない

| | 全くあて はまらな い | ほとんど あてはま らない | あまりあ てはまら ない | 少しあて はまる | かなりあ てはまる | よくあて はまる | 合 計 |
|-----------|-------------------|---------------------|--------------------|-------------|--------------|-------------|------|
| 漠然的危機感 高群 | 12.2% | 31.7% | 31.7% | 14.6% | 9.8% | 0% | 100% |
| 低群 | 39.6% | 35.4% | 16.7% | 6.3% | 2.1% | 0% | 100% |
| 全 体 | 27.0% | 33.7% | 23.6% | 10.1% | 5.6% | 0% | 100% |

 $(\chi^2=12.22, p<.02)$

| | 全くあて はまらな い | ほとんど あてはま らない | あまりあ てはまら ない | 少しあて はまる | かなりあ てはまる | よくあて はまる | 合 計 |
|-----------|-------------------|---------------------|--------------------|-------------|--------------|-------------|------|
| 具体的危機感 高群 | 23.3% | 25.6% | 27.9% | 18.6% | 2.3% | 2.3% | 100% |
| 低群 | 32.1% | 33.9% | 19.6% | 5.4% | 7.1% | 1.8% | 100% |
| 全 体 | 28.3% | 30.3% | 23.2% | 11.1% | 5.1% | 2.0% | 100% |

 $(\chi^2=6.95, N.S.)$

7項目の回答値を親ごとに合計して、漠然的危機感得点、具体的危機感得点とした。そしてそれぞれについて、得点の高い親と低い親との間で、子育て態度や悩みの相談傾向を比較した。

その結果、「身近に相談する相手がいない」と

いう質問に対する回答傾向に、一つの特徴が見いだされた。表6からわかるように、相談相手がいないという回答は、具体的危機感得点の高低によっては変わることがないが、漠然的危機感得点の高い親の群では、低い群に比べて相談

相手がいないと回答する傾向が見られたのである。このことは、相談相手がいないということではなく、単に人が見つからないということではなく、具体的な子どもの行動のように相談内容の明確でない諸々の不安材料を話題にできる話し相手はなかなかいないという問題の可能性を示唆している。

親の人生経験からみた子育て意識

いわゆる新米の親とベテランの親という言い方がある。単に子育て経験年数をさすこともあるが、たいいていはその親自身の年齢を念頭において称される。そしてより年長の親は年少の親に比べると子育ての見通しがもって余裕があるように言われ、したがって支援を必要とするのはもっぱら若い親であるということになりがちである。だが実際はどうだろうか。この点を検討する。ただしベテランの親といっても、子どもの年齢のみならず、子どもの人数、親の生涯時間における子育て期の占有時間、子育てへの関与度など多くの関連要因がある。だが本研究では特定の学級を通じて協力を依頼したため、子どもの年齢すなわち子育て時間に大きな違いがないことから、さしあたりの試みとして、親の現年齢のみを指標とした単純なとらえ方で、年少の親と年長の親とを比較することにする。そこで、回答者を年齢分布のほぼ中央値にあたる43歳以下と44歳以上とに分け、各項目に対する回答を比較した。

その結果、表7から明らかなように、年少の親と年長の親の間で回答に有意な違いが見られた項目がいくつかあった。

① 思春期の特徴が反映

年長の親の回答では、年少の親に比べて食事中に家族でよく話すことが少ない。ただしそれでも肯定的回答は合計で77.1%あり、年少の親の96%に比べれば少ないものの、過半数は食事中の会話があると答えている。また、子どもとの話の際に目を合わせない傾向が強い。年少の親には肯定する回答が皆無であることと比べると、顕著な傾向である。これらは親側の要因も

考えられるが、思春期の子ども側の要因も想定される。

② 乏しい相談相手

子育てを通して知り合う人は単純に考えれば蓄積されるのだが、実際にはいろいろの角度からみても相談相手が乏しいのが年長の親である。身近に相談相手がいないという直接的質問に対して、約3割の親が肯定しているのは、年少の親では「少しあてはまる」という回答が6%あったほかはすべて否定的回答であったことをみると、多いといえる。また祖父母と話すことも少なくなる。子どもが年少の時には祖父母の育児支援を受ける機会が多いが、子どもの身辺的自立や祖父母の高齢化がすすむと、そうした機会が少なくなる。これに合わせて、相談や会話の機会も減少することが考えられる。

さらに年長の親は、年少の親に比べると相談を受けることも少ない。知人友人から子育ての相談を受けることがよくあるかという質問に「まったくあてはまらない」と「ほとんどあてはまらない」という強い否定回答が過半数にのぼり、否定回答全体で約7割になっている。これに対して年少の親は否定が5割弱、肯定が5割強である。子どもの友だちの親との関係も年長の親は比較的疎遠で、気軽に話ができるかという質問に肯定否定が半々である。年少の親は8割が肯定的である。

いずれの視点からも、年長の親の相談相手の乏しさが特徴づけられている。

③ 相談手段の限定

相談手段に対する回答をみると、電話、電子メール、直接対面のいずれの相談手段でも年長の親は年少の親に比べて用いていない。つまり相談自体が少ない。特に電子メールは用いず、「全く使わない」という回答が年少親の2倍の約8割にのぼる。

相談することと相談されること

「子育てのことで相談されることがある」という質問と「子育てのことを相談できる友人がいる」という質問の回答分布を見ている。(表8)

表 7 親の年齢層別回答分布

食事をするときは家族でいろいろなことをよく話す

| | 全くあて はまらな い | ほとんど あてはま らない | あまりあ てはまら ない | 少しあて はまる | かなりあ てはまる | よくあて はまる | 合 計 |
|-------|-------------------|---------------------|--------------------|-------------|--------------|-------------|------|
| 44歳以上 | 0% | 6.3% | 16.7% | 22.9% | 39.6% | 14.6% | 100% |
| 43歳以下 | 0% | 0% | 3.9% | 23.5% | 43.1% | 29.4% | 100% |
| 全 体 | 0% | 3.0% | 10.1% | 23.2% | 41.4% | 22.2% | 100% |

子どもと目を合わせて話をすることはほとんどない

| | 全くあて はまらな い | ほとんど あてはま らない | あまりあ てはまら ない | 少しあて はまる | かなりあ てはまる | よくあて はまる | 合 計 |
|-------|-------------------|---------------------|--------------------|-------------|--------------|-------------|------|
| 44歳以上 | 41.7% | 22.9% | 10.4% | 18.8% | 4.2% | 2.1% | 100% |
| 43歳以下 | 66.7% | 23.5% | 9.8% | 0% | 0% | 0% | 100% |
| 全 体 | 54.5% | 23.2% | 10.1% | 9.1% | 2.0% | 1.0% | 100% |

子どものことで不安や心配なことがあっても身近に相談する相手がいない

| | 全くあて はまらな い | ほとんど あてはま らない | あまりあ てはまら ない | 少しあて はまる | かなりあ てはまる | よくあて はまる | 合 計 |
|-------|-------------------|---------------------|--------------------|-------------|--------------|-------------|------|
| 44歳以上 | 19.6% | 26.1% | 23.9% | 15.2% | 10.9% | 4.3% | 100% |
| 43歳以下 | 32.7% | 36.7% | 24.5% | 6.1% | 0% | 0% | 100% |
| 全 体 | 26.3% | 31.6% | 24.2% | 10.5% | 5.3% | 2.1% | 100% |

ふだん子どもの話や世間話をする相手は祖父母だ

| | 全くあて はまらな い | ほとんど あてはま らない | あまりあ てはまら ない | 少しあて はまる | かなりあ てはまる | よくあて はまる | 合 計 |
|-------|-------------------|---------------------|--------------------|-------------|--------------|-------------|------|
| 44歳以上 | 34.8% | 23.9% | 13.0% | 15.2% | 8.7% | 4.3% | 100% |
| 43歳以下 | 15.7% | 7.8% | 21.6% | 31.4% | 21.6% | 2.0% | 100% |
| 全 体 | 24.7% | 15.5% | 17.5% | 23.7% | 15.5% | 3.1% | 100% |

子育てのことで知人や友人から相談されることがよくある

| | 全くあて はまらな い | ほとんど あてはま らない | あまりあ てはまら ない | 少しあて はまる | かなりあ てはまる | よくあて はまる | 合 計 |
|-------|-------------------|---------------------|--------------------|-------------|--------------|-------------|------|
| 44歳以上 | 23.9% | 30.4% | 17.4% | 23.9% | 2.2% | 2.2% | 100% |
| 43歳以下 | 5.9% | 19.6% | 17.6% | 31.4% | 19.6% | 5.9% | 100% |
| 全 体 | 14.4% | 24.7% | 17.5% | 27.8% | 11.3% | 4.1% | 100% |

子どもの友人の親とは気軽に話ができる

| | 全くあてはまらない | ほとんどあてはまらない | あまりあてはまらない | 少しあてはまる | かなりあてはまる | よくあてはまる | 合 計 |
|-------|-----------|-------------|------------|---------|----------|---------|------|
| 44歳以上 | 10.9% | 15.2% | 17.4% | 19.6% | 30.4% | 6.5% | 100% |
| 43歳以下 | 0% | 2.0% | 18.0% | 38.0% | 32.0% | 10.0% | 100% |
| 全 体 | 5.2% | 8.3% | 17.7% | 29.2% | 31.3% | 8.3% | 100% |

電話で相談

| | 全く使わない | ときどき使う | よく使う | いつも使う | 合 計 |
|-------|--------|--------|-------|-------|------|
| 44歳以上 | 37.2% | 51.2% | 9.3% | 2.3% | 100% |
| 43歳以下 | 12.8% | 57.4% | 21.3% | 8.5% | 100% |
| 全 体 | 24.4% | 54.4% | 15.6% | 5.6% | 100% |

メールで相談

| | 全く使わない | ときどき使う | よく使う | いつも使う | 合 計 |
|-------|--------|--------|-------|-------|------|
| 44歳以上 | 78.6% | 16.7% | 4.8% | 0% | 100% |
| 43歳以下 | 39.6% | 47.9% | 10.4% | 2.1% | 100% |
| 全 体 | 57.8% | 33.3% | 7.8% | 1.1% | 100% |

直接会って相談

| | 全くしない | ときどきする | よくする | いつもする | 合 計 |
|-------|-------|--------|-------|-------|------|
| 44歳以上 | 34.9% | 46.5% | 18.6% | 0% | 100% |
| 43歳以下 | 6.1% | 57.1% | 32.7% | 4.1% | 100% |
| 全 体 | 19.6% | 52.2% | 26.1% | 2.2% | 100% |

注) いずれの表も5%未満のセルを隣接セルと合算後に検定

される度合いとできる度合いをクロス集計したところ、両者にずれのあった回答者は、多くが「できる」が「される」を上回ったものである。さらに6件法の評定値で2点以上のずれのあった回答者は、全有効回答105名のうち、「できる」優位が25名、「される」優位が3名であった。相談と被相談が裏表の関係であれば、両者のずれがある人があっても全体としては相殺されるはずなので、この違いは興味深い。「される」が現実を問題にした指標であるのに対して、「できる」は期待を表すためであると考えられる。

「子どもどうしのことで、相手の親と関係が悪くなったことがある」という項目への肯定の回答は21%あった。程度の差はあれそうした経験は相談相手の選択や相談自体の抑制になるかを検討するため、相手の親と関係が悪くなったことがある回答者とそうでない回答者の間で、相談相手がいるか否か、相談相手・話し相手に誰を選ぶかなどの項目の回答を比較した。しかしいずれも有意な違いは見いだされなかった。

表9 危機感レベルと少年事件の既知度

(人)

| | よく知っている | 少し知っている | 全く知らない | 合 計 |
|-------|---------|---------|--------|-----|
| より漠然的 | 14 | 19 | 11 | 44 |
| より具体的 | 24 | 21 | 1 | 46 |

$$\chi^2=11.02, p<.01$$

表8 相談できる程度と相談される程度の関係
(人)

| | 相談される | | | |
|-----|-------|----|----|-----|
| | 高 | 中 | 低 | |
| 相 高 | 13 | 16 | 3 | 32 |
| 談 中 | 2 | 28 | 17 | 47 |
| で 低 | 0 | 4 | 22 | 26 |
| き | 15 | 48 | 42 | 105 |

考 察

本研究では、子どもの問題行動の深刻さや親自身の子育て経験の浅さなどの単純な図式からずれたところにも、相談に至ることのない親自身の別の困難があり、支援の必要性があるのではないかという問題意識で分析を試みた。

その結果、個別の問題よりもいろいろの場面から漠然と感じる子どもへの危機感をもつ人が、相談できる相手がいないと考える傾向にあることがわかった。また子育て経験を積んだと考えられる年長者が、子どもの思春期特有の接しにくさも相まって困難を抱えているにもかかわらず、相談相手が年少者より不自由になっていることもわかった。そして、相手には相談できると考えながらも、現実になされている相談関係はそれよりも限られたものであることも示唆された。そうなると問題の所在は、相談できる相手を見つけないということよりも、とりとめない話であっても気軽に相談し合える関係づくりということになるであろう。

なお漠然的危機感のことを考える上で手がかりを与えてくれるデータがある。

漠然的危機感得点と具体的危機感得点の差を利用して、漠然的危機感の方が強い親の群と具

体的危機感の方が強い親の群とに分類した。そして両群の親に対する鶴ヶ島市での少年事件を知っているかという質問への回答を集計したが、表9である。漠然的危機感の強い親の方が、事件を知らないと回答している。けれども漠然的危機感を算出するために用いた質問には、「子どもの起こす事件を聞いていると自分の子どももと不安になる」という質問が含まれているのである。事件のことを詳しくは知らないが、何となく少年事件にわが子を重ねて考えてしまうというのが、まさに漠然的危機感の所以であろう。こうした不安が払拭されるような、親が自信をつけられるような場面もまた、広い意味での相談関係に求められるのであろう。

(馬場久志)

研究2 面接聞き取り調査

問 題

ある小学校でのこと。著者が人権に関する講演を終えた直後、何人かの保護者が駆け寄ってきた。

「有難うございました。気持ちが楽になりました。」「子どもが帰宅したら、抱きしめてあげようと思います。」等々。何が母親達の心の琴線に触れたのか定かではないが、見えざる力が働いたのかもしれない。

その夜、一本の電話が鳴った。これも講演を聞いた母親からのものであり、子どものことで悩んでいると言う。夫は単身赴任で、同居していた実母も先頃亡くなり、今は二人の子どもと三人暮らし。「中学生の長男の「家庭内暴力」で、困っている。食事満足にとれず、これで

は娘が衰弱してしまう。」と泣いておられた。お逢いする約束をして電話を切り、翌日待ち合わせの場所に向かった。そこでの話が発端となり、これは特殊な事例ではなく、ごく普通の家庭に起こっているという危機感から、今回の調査に至ったのである。

目 的

小・中学生を抱える母親達の本音を聞きながら、その奥にあるものは何か。どこに問題点があるのかを探ることで、解決策への手掛かりを見い出すことを目的とした。

第1 回聞き取り調査

2005年10月31日に、埼玉県内の会議室にて小学生を抱える母親達の声を集団場面で収集した。所要時間は3時間、9名の母親の参加を得た。

以下に母親の発言を抽出する。なおカッコ内は子どもの学年・性別である。

【資料】 小学生の母親からの聞き取り内容

Yさん (中1・男)

・軽度ではあるが知的障害児を抱えており、担任との密なコミュニケーションが必要。障害の程度は一人一人異なり、その子の成長に合わせた見守りをお願いしたい。中学に行くと、欠点・短所を指摘されることが多く、個性がつぶされていくように感じる。効率よく出来る子、言い換えれば、作業を上手くこなしていける子に育てようという意識の方が先行しているように思う。

・また小学校では障害児学級に席をおきつつも普通学級にも在籍していた。しかしながら、中学校では障害児学級にいる方が多い。これでは公立高校には行けず、将来が不安である。

Mさん (小4・男/小1・女)

・主人の父と同居。介護等に時間をとられ、自分の時間が持てなくなった。その結果、子どもとの会話が少なくなってしまった。

・その後、祖父の死に立ち会い、精神的ショッ

クからか長男にじんま疹発症。またこの頃から、嘘をつくようになった。妹の会話から状況を想像することが出来、叱ったりすぐに正したりすることは避けようと努力している。

Tさん (小6・男)

・小学校時代は成長に個人差が大きいと思う。一人っ子のため、兄弟からの影響もなく、幼く見られてしまう。そのため、いじめの対象となることも多々あり。

・学習面においても、授業の進度についていけないところも見受けられ、補習なり個人的サポートをして頂けると有難い。もちろん親もフォローはするが、すぐに塾というのは納得しかねてしまう。

Sさん (小6・男/小2・男)

・子どもが高学年になり、先の教育費のことも考えパートに出ることにした。これまでと違い、親の目が行き届かなくなったように思う。例えば、学校生活や友人関係・宿題や学校のお知らせなどあまり聞かなくなったように思う。

・また進級するにつれて、言い換えれば担任により、子どもの評価があまりにも異なってしまう。親としては大いに戸惑った経験がある。と同時に、子どもではなく親が“救われた”という感覚を持てた時、とても心が軽くなった。そういう出逢いを親子共に望んでいる。

Nさん (小4・男)

・小2の時に学級崩壊があった。これは個人的に責められてしまうが、家庭問題のみならず、学校(担任)に問題があると分かった。一つの事象を多角的にとらえることが出来ればと思った。厳しい言い方をすると、教師の質が落ちていないのではないかと感じてしまった。

・今のところ、まだ反抗期に入っていないようだが、自主性に任せる時期にきているようだ。細かいことは本人の意志に任せ、見守ることだと痛感している。

Cさん (中3・女/小3・男)

・小学校時代は個人差が身体的にも精神的にも大きいと思う。我が家の場合、娘は小4の時に

反抗期だった。比較的自分の意見を言えるタイプだったので、友人関係でもトラブルはあったのではないかと。自立していた分、親には見えないことが多かったように思う。

Iさん（中1・女/小5・女/小1・女）

・まだ下の子が小さく、家にいてほしいと言うので働いていない。役員をしており、学校へ来る機会も多く、情報を比較的入手しやすい。

・3人おり、それぞれの様子が見える。中1の場合は、部活を通して先輩・後輩という新たな関係が出来、毎日充実しているようだ。小5の場合は、友人関係でささいなトラブルはあるようだが、互いに仲直り出来るグループのようで学校生活を楽しんでいる。小1は甘えるところはあるが、上の姉達を見ていろいろと学んでいくと思う。親はのんびりと構えている。公開授業（以前は父親参観といったもの）にも参加している。

Fさん（小6・男/小4・女/小1・女）

・上の息子は小2の時に転校してきた。初めはトイレに駆け込み、学校に行きたくないという状況もあった。しかし、来校時に担任の先生の対応が良かったのであろう。スムーズに通学できるようになった。

・小4の娘はしっかり者で、自分なりに学校生活を楽しんでいるようだ。下の娘は、運動会で「つまらなかったから」ということで踊りをしなかったことがあり、これは担任をはじめクラスメートとその保護者に、どのように受け取られたか気になった。

Kさん（小4・男/小2・女）

・30人学級なので、先生も目が行き届くと思う。来年は2クラスの予定で、子どもの格差をどう指導していくのだろうか。教科によっては進度別クラスもあり、細やかな対応を望みたい。

・親が役員をしていると、友人関係も広がり相談する事も出来る。

考 察

出席した母親達は顔見知りも多く、学級懇談会とは異なる雰囲気できれいに話してくれた。ただ設問をもっと考えておくべきで、核心に迫ることができなかった。例えば、父親の関わり方や学校への希望等をもっと把握できたらと反省している。アンケートを作成する前の予備的な含みもあり、母親達がこういう場の提供や仲間の必要性を感じていることを大いに理解する事ができた。と同時に、役員をしている人や兄弟・姉妹のいる母親の方が、ゆとりを持っていると感じた。これは経験や情報量の違いによるのではないだろうか。

また働くことに、低学年がいる家庭では多少引け目を感じている所が見受けられた。目が行き届かなくなったり、話をする時間が少なくなったりするので、何か事が起きると「仕事のせい」と責められるような気がするというのが本音であろうか。ここにも母親の見えない壁があるようだ。

まだ小学生では、比較的悩みや問題が母親の手に委ねられているように思う。父親の“出番”が少ないことも事実であるが、出番を敢えて回避しているところがないとは言えない。この時期に子どもと十分なコミュニケーションをとることが大切ではないか。時に中学生になると反抗的な芽生えもあり、父親の役割が更に重要になってくる。

とはいえ、母子家庭もあり教師（担任）の性別が大きく関わってくる例もあり、担任の細やかな配慮が必要なことはもちろんである。

最後に「このような会を年に何回か、学校とは別枠で設けてほしい」という声が聞かれ、直接親や子どもと無関係な人に客観的に聞いてもらいたいようだ。言い換えれば、そういう寄りでどこを求めているように思う。ただ、このような会に参加した親やその子どもよりも、むしろ学校の懇談会にすら出席しない家庭に、どのような問題が内在しているのか、気付いてもらう方がもっと重要な点である。

第2回聞き取り調査

2005年11月28日に、埼玉県内の会議室にて中学生を抱える母親達の声を個別面接で収集した。11名の母親の協力を得て、合計所要時間は7時間であった。

以下に母親の発言を抽出する。なおカッコ内は子どもの学年・性別である。

【資料】 中学生の母親からの聞き取り内容

Hさん（高1・女/中2・女/小6・女）

- ・他の子どもと比べてみると、同じ学年の中でも少し感覚が異なる面が見られる。興味あることのみに没頭し、他のことには無頓着なようだ。勉強や学校行事にもあまり参加したがない。親としては進学も控え、やるべきことをやってほしい。家庭においても姉妹の真ん中であり、バランスをとるような傾向が見られる。

- ・小学校時代、いじめられることがあった。言葉の暴力にあっていたようだ。忘れ物を届けに行った際に、現場に出くわしたことがある。教室に入れてもらえなかったり、物を壊されたり、足ばらいされたりと嫌な思いをしていた。このような経験からか、クラスメートと積極的に関わろうとしない。親自身も担任や友人等から情報が得られず、精神的ストレスをため込まなければ良いが…と心配している。

- ・部活は運動系で、上下関係の規律は守っているようだ。買い物に出掛けた折、良く声は掛けられるものの、グループの中には入っていきたくない。

- ・携帯もパソコンも持たず、客観的には真面目と評価されている。

- ・自営業なので自分自身も手伝っており、比較的両親の目は行き届く方だと思う。

Nさん（中1・女）

- ・自宅から近いところで、2～3時間のパートを始めた。これをきっかけに家事の手伝いをしてくれるようになった。

- ・小学校中学年より、いじめにあっていた。遊

びに行くと、良く泣いて帰ることがあり、友人を選ぶことの大切さや無理してつき合うことはしなくて良いと話し合ったことがある。また体験を通して、ゲームソフトやおこづかいのこと等友人から学ぶこともあったようだ。

- ・中学に入り、部活の上下関係はうまくいっているようだが、親に相談したり、了解を得ずに決めてしまうことも増え、心配している。（例えば、友人と出掛けることや持っていくおこづかい等）行動範囲が広がり、友人の変化・先輩とのつき合い方など親には見えないことが増えた。これも自立と受け止めるべきなのであろうか。

- ・小学校時代は親同士も仲が良く、連絡が密であったが、中学生になると横のつながりがなくなってしまった。時には嘘の積み重ねと思えることもある。

- ・メールのやりとりも多く、わが家のルールとして夜9時以降の電話やメールは禁止した。パソコンの位置も、皆で使える所にと設置場所を変えた。

- ・また本屋さんには規制がないのであろうか。親でも首を傾げたくするようなコミック本やビデオがあり、小学生でも自由に買うことができる。これは社会的問題として考えてほしい。

Kさん（中2・女/小6・男）

- ・週に3回パートに出ている。小6くらいから子どもの友人関係が見えず、あまり話さなくなった。母親自身も子どもの様子を把握しようとしなくなったように思う。例えば、友人関係で悩んでいたのであろう。明るい娘に少し変化が見られたが、大丈夫だろうとあえて無関心を装っていたことがあり、やはり気付いた時点で、声は掛けてやるべきだったと反省。

- ・中学生になり、はじめは部活に戸惑いもあったようだが、楽しくやっている。

- ・まだ進路・受験については遠い感覚のようで、目下部活とマンガに興味を持っている。

- ・小学校時代、担任と合わず苦勞した経験がある。中学校と違い教科別ではないので、これは

親子にとって深刻である。

- ・父親との関わりが、中1より反抗的になった。父親と娘とのコミュニケーションは、どのようにしたら良いのか。

- ・子どもに関する悩みや相談は、担任や自分の友人にするがむずかしい面もある。

- ・携帯は今のところ母親と共有であるが、そろそろ限界かなと思っている。(高校生になってからと言いつ聞かせているが…)

- ・また言葉づかいや行儀が悪いのではないかな。常々注意はしているが…。

- ・塾には通っていないが、目標をもって勉学に励んでほしい。

Aさん(高1・女/中2・男)

- ・内弁慶で内面とのギャップがあり、ストレスがたまっていないかと先生に言われることがある。

- ・父親に威圧感があり、避けようとするきらいがある。

- ・部活は運動部に属し、先輩・後輩の關係に特に問題はないようだ。ただ何かあったとしても、本人としては傍観者の立場をとり、避ける傾向が見られる。

- ・自分と気の合う子としか遊ばない。また相手の立場を理解しようとせず、協調性がないのではと心配。

- ・中1の時、家庭の中だけではあったが、少し荒れたことがある。それは学習面についていけなかったことによる。英語で点数がとれず、ストレスになっていたようだ。先生に塾に行くように言われた。全く補習もなし。しかも反抗的態度をとる生徒には「評価1」をつけるという。教師の資質に問題はないか。またAET(英語指導助手)は、あまり役に立っていないように思う。また絶対評価も学校間格差があり、受験に大きく影響すると思う。

- ・携帯はなし。パソコンは家族で共有のため見える所に設置し、夕方と決めている。時々友人とテレビゲームをしたり、一人でやることもある。

- ・小学校の時、いじめていた方かもしれない。卒業時に子どもの親より言われた。暴力なのか、親愛の情なのか判断しかねることがあったとのこと。家庭内でも姉としばしば口げんかをしている。姉をうっとうしく感じているようだ。

- ・父親は子どものことに積極的に関わりたくないようだ。確かに言えば協力してくれると思うが、コミュニケーション不足のせいか、会話にズレがある。ピントはずれのため、子どもも余り話したがらない。仕事は忙しく、夜11時頃帰宅の毎日。日曜しか休みはなし。

- ・何かあった時に相談できる人とはいうと、両親や友達になってしまう。担任については、話したいとは思ふもののやはり考えてしまう。これまでを振り返ってみても、信頼できる先生との出逢いは数少ない。

- ・子ども同士でランク付けをする傾向がある。例えば「あいついなくても良いよな。いてもいなくても問題なし。」といったような感覚がある。これは教師にも見られるように思う。ふるいにかけられる子どもたち。

- ・一緒にいても会話をせずに、メールに没頭する親子を見かけるが、これは現代の世相を写し出しているのではないかな。

- ・自宅から近い所に勤めて4年になる。子どもが出かけてから勤めに行き、昼休みに自宅に戻り、家事を済ませまた勤め先へ。子どもが帰る前に帰宅できるので安心しているが…。

Mさん(高3・男/中3・男/小6・女)

- ・目下義母の介護中である。

- ・部活の顧問と良い関係が築かれている。子どもにとって兄のような存在であり、女生徒のつき合い方などアドバイスをしてくれるようだ。この年令時に、どのような大人に出逢うかが重要だと思う。顧問に救われていると感じている。

- ・先生の質が落ちているのではないかな。大人気ない言葉をぶつけられることがあり、人間性を疑ってしまうようなこともあった。

- ・一方、クラブを引退した後、夜集まるようになった。仲間意識があつて断れなかったと言う。

その時夫が逃げず、子どもとつき合って待ち合わせの場所に行ってくれたり、夫婦で良く子どもと話し合ったりした。義母は黙って見守っていてくれた。もしこの時、母親一任だったら乗り越えられなかったと思う。またこの状況の中で三者面談があり、担任に「このままじゃ、チンピラになるよ!」と言ってもらったことで、変化が生じた。「先生はちゃんと見ていてくれた」と子ども自身が納得できたのではないか。本気で叱ってくれる大人が家族以外にいるかどうか。出逢えるかどうかは、とても重要だと思う。中学時代は人間教育こそ大切であり、どのような先生と出逢えるか、先生との信頼関係が行動力の歯止めになると感じた。これ以後、「中学の先生になりたい。」と言うようになった。(高3・男の中学時代について)

- ・また学校の授業についていけないことから登校拒否になり、非行一步手前にいくケースもあるのではないか。

- ・学校でも家庭でものびのびとしている。おおらかで良くおしゃべりをし、自分の部屋に入りがたがらない。リビングでテレビを見ていることが多くなり、当然チャンネル争いも起きるので家庭内ルールを決めた。これが共に暮らしていく家庭教育の原点ではないか。(中3・男について)

- ・個室の必要性についても、改めて考える機会となった。家庭の中での居場所づくりー子ども・夫婦・老夫婦の三世代のコミュニケーションのとれる時間・空間等。

- ・時間の遊びがないような気がする。大人も子どもも効率性のみ重視されているのではないだろうか。

- ・中学生活において、いろいろな場面でバランスをとることに、子ども達も苦勞しているのではないか。友人関係を含め学校でのバランス、家庭の中での兄弟等のバランス、そして心と体のバランス等。

- ・転校生がおり、「お願いしたのに面倒をみてくれない。いじめられている」という報告を受

け、大変驚いた事がある。授業参観の折、相手の祖父母に子ども本人が呼び止められ「いじめないで」と言われたという。一方的判断で、娘はとても傷ついたようだ。担任は現状調査をせず、何の指導もなかった。誤解をきちんと処理してほしかった。(小6・女について)

- ・携帯は長男が高校入学後、次男は中3になってから持つようになったが、ルールを決めている。

夜遅くまで使用しないこと、使用料はこづかいの中から清算すること等。友人から夜の11時半頃メールがあったことがある。その結果就寝時間が遅くなり、朝起きられずに朝食抜きで出かけたことがあった。

- ・パソコンは居間に設置しており、子ども達は使用できない。

- ・多感な年頃であり、いろいろな問題が出てくるが、やはり学校(先生)には言えない。言い換えれば公的なところへは相談に行かないのではなく、行けないということ。

Iさん(中2・男/小6・男)

- ・担任によって、子どもが変わることを実感。長男は小1の時に、「元気すぎる。前を向かず、言う通りにならない。」と言われたことがある。母子家庭であり、男の先生への違和感があったようだ。「精神病院へ行ってみてはー?」と描いた絵から、そのように判断されたことがあった。ところが、小2になり女性教師になったことからのびのびし出した。先生にも「全く問題なし。」と言って頂き、どれだけホッとしたことか。担任との相性というか、出逢いが子どもにとって大きな影響を及ぼすものと感じている。(中1では学年トップの成績・中2では生徒会長)

- ・次男については、先生に反抗的な態度をとるということで、電話を頂いたことがある。昨年在小1の担任であり、小6とは雲泥の差があると思う。先生にもチャンネルを切り替えるだけの余裕がほしい。配慮の足りなさを感じることがあり、教師の資質・適応能力等を考えさせられた。

Uさん (中2・女/小5・男)

・学校での交友関係について、中学生になると余り話したがらなくなった。友人とはメールで交換日記をしており、夜9時以降は駄目というルールを作った。(小5より携帯を持つようになった。)また料金も一定額を決めており、あまりにも多額の時にはきちんと叱った。

・弟のサッカーの関係で一人にすることが多く、少し距離をおいてしまったのだろうか。

・年中から続けているプールには週6回も行っており、他校の友達との関わりが楽しいようだ。

・中学生生活に入り、周りの友人に左右されることが多く、言葉があらくなったり、キレやすくなったように思う。

・小学生の頃は消極的であったが、中学生になって、積極性が見られるようになった。

・小6の時、公園にいたずら書きをされたことがある。原因ははっきりしない。(本人より報告あり)

・小5の男の子については、あまり母親と話したがらなくなり、学校の様子が分からない。唯、授業中「落ち着きがない。」と担任より言われ、どうしたものかと考えている。本人は「先生が怖い！」と言っている。サッカーが好きで、皆とやるのが楽しいようだ。

Sさん (中1・女/小5・男/小4・男)

・パートに3時間/日出ている。子ども三人は、仲が良い方だと思う。

・おけいこ事が多く(クラシックバレエ・ピアノ・そろばん等)、忙し過ぎて母親との会話が少ない。父親とは土・日のいずれかのみ。

・携帯は月額3,000円までとする。(メールはかけホウダイ・電話は連絡用のみ)

・パソコンは使用しない。

・弟二人はサッカーをやっており、土・日は忙しい。日曜は、娘一人留守番をしているが、苦にならないようだ。

Yさん (中2・男/小6・男)

・兄弟仲が良い。長男は部活の長をしており、責任感が強い。塾へは行かず、授業に真面目に取

り組んでいるようだ。

・友人が多く、中学生生活を楽しんでいる。ただ、小学生の時には少し問題行動があった。小6の時に集団で万引きをしたことがある。小4の時に友人が盗ったのを見たことがあり、それがずっと心の隅に引っかかっていたようだ。父親が子どもと良く話し合い、ようやく解決した。

・中学生になり、時々父親と口論している。

・万引き事件の時、担任より親に報告するように言われ、本人自ら報告。ただその時の対応が原因か、担任との信頼関係が築けなくなってしまった。

・小6の次男については「一匹狼」のようで、あまり人と交わることをしない。口数も少なく、母親としては聞き出すことがむずかしい。ただスポーツ(ミニバスケット)をやっており、他校の子と遊びたいと言っている。

・中2の兄は携帯を持っており、使用料金は5,000円以内(2ヶ月)としている。メールはしているようだが、深夜は駄目というルール。この点については相手があり、まだ課題が残っている。

・母親は自宅にて内職をしている。

・何か子どものことで相談したい時は、①友人 ②主人 ③担任という順序である。

Tさん (中1・女/小6・女)

・両親共にパソコンを使用するので、子ども達にも日常生活の中に自然に入ってきている。ただし、一人1時間までというルールがある。

・携帯はなし。相手と違って話をすれば解決できる事も、メール上ではむしろトラブルに通ずることもある。残っているデータがあるため、友人・知人に送ることも可能で、繰り返し見る中で、増幅される危険性もある。

・母親は何か事が起きた場合、じっと待つこと・見守ることしかできない。小学校時代、年2回くらい休んだことがあったが、強要はせず気持ちが落ち着くまで待つということを学んだ。

・妹の場合は、以前不登校になったことがある。

通学班のことで問題があったようだ。一時男子が荒れていたり、遅れてくる子がいたりで、気持ちが重くなってしまった。自己判断するにはまだ幼い面もあり、主人からいろいろ話をしてもらった。例えば「嫌なこともあるけど、お父さんは会社へ行ってるよ」というように伝えてもらった。きっかけを作ることで、また元気になり学校へ行くようになった。

- ・母親と父親の役割分担が功を奏したのではない。子ども達の心は繊細だということを忘れてはいけないと思う。

- ・中学生になると、いろいろな面で反発する時期ではないか。例えば担任への批判もある。先生が、生徒個人の家へ「先生の悪口を言っていたらどう」というような電話をしてくることがあったという。全く教師の人間性を疑ってしまう。

- ・部活との両立も時々むずかしい面もあるようだが、本人の選択に任せている。塾にはまだ行っていないが、今後の課題でもある。

Rさん(中3・女/中2・女)

- ・長女は自立している方だと思う。小1の時知恵遅れの子がクラスメートにおり、この子の面倒を良く見ていた。

- ・中学生になり、クラスでは比較的一人であるほうが気楽なようだ。また男子生徒の方が楽だという。(友人の悪口は言わない・聞かない) 貧乏くじを引くタイプー揉め事がきらいで、自分でがまんするタイプ。友人は気遣ってはくれるが、それ以上の交流はない。

- ・高校は推薦で決まり、ホッとしたようだ。私立校という選択肢もなくはないが、夫の給与明細を見せきちんと話し合った。

- ・次女については友人大好き、嫌いな子にも良い顔が出来るタイプ。

- ・母親とのコミュニケーションはとれている方だ。夫は協力体制にあり、父親としての役割を果たしている。父親には決して娘達に手を挙げてはいけないと常に言っている。娘達も「パパには怒られたくない!」と思っているようだ。

- ・携帯は二人とも持っているが、月額3,000円以内のこと。また自分の部屋には持ち込まない。夜10時以降は母が預かる。メールに関しても、食事中・話し中・来客中は出てはいけない。これらのルールを家庭で取り決めている。

- ・パソコンについては居間に置いてあり、共有している。インターネットに接続したい時は、母親に声を掛けてから使用。父親も、家族のしている所でノートパソコンを広げている。

- ・中学生になってからは、大人として扱う雰囲気作りを心がけている。言い換えれば、意見交換の出来る家庭であり、家庭の中に居場所をそれぞれが感じられるような生活空間でありたい。買い物を皆で一緒に行くこともある。

- ・ストレス発散方法を知っているようだ。走りに行くこともある。

- ・喜怒哀楽の情を表すことが出来る。子どもが膝にのってきたり、私も未だに頭をなでたりすることがある。子どもはホッとして、浄化しているのではないだろうか。

- ・家庭生活でも社会でも、ルールを教える場所ではないか。会話こそ大切だと思う。

考 察

中学生になると、やはり問題が大きくなり、母親一人では解決できない事も多々あった。これまで培ってきた父親の役割が重要となり、これによってかなり救われる例が見受けられた。また家族や担任以外に、どれだけの大人と関わりを持っているか。具体的に言えば、何か事があった時に叱ってくれる人がいるかどうか。この点も重要と思われる。かつて総合的な学習に関わった折、「担任や友達のお母さん以外で、こんなに親しくなれたのは初めて」と言われたことがある。やはり子ども達を社会で、地域で、見守り育てる土壌づくりが大切ではないか。

そして子ども達は心身ともに未熟であり、大人の何気ない言葉で傷つき、信頼関係が壊れてしまうことがある。もっと大人が心しなくては

ならないと思う。特に、学校において教師は学習指導者のみならず、人間教育者であることを忘れてはなるまい。また中学生生活の3年間は比較的短いものであり、受験という大きな挑戦もある。親子共に精神的負担は言うまでもなく、それ故に、この時期をもっと大らかに育てられる方策を考えたいものである。中・高一貫教育もその一つであろう。

更に、かつてとは違い様々な情報が簡単に入手できる昨今、手段に惑わされることなく、確固たる人間関係を築くためにも、コミュニケーションの重要性が問われている。人間は他人とのふれあいや会話を通じて学んでいく生き物に他ならない。

今回、中学生を抱える母親達の本音を聞きながら、真剣に聞いてくれる人を欲していることが浮き彫りになった。やはり親もまた、悩みながら子育てに向き合っており、子育て支援は少子化対策のみならず、思春期の子どもを抱える親にも向けられるものではないだろうか。新しい時代に即した情報交換の場—すなわち“井戸端会議”・“縁側談議”が求められており、ここには経験豊富な年長者の参加を得ることも大切な点である。

(原田裕子)

まとめ

本研究は、親のかかえる子育て困難を明らかにすること、それらが夫婦間や他者とのやり取りの中でどう扱われているかを分析すること、および他者からの支援の機会である相談関係に結びつく可能性を探ることを目的としてきた。それぞれについては各節において述べられてきたとおりであるが、総じて浮き彫りになった問題は、相談し支え合う関係を機能させる上で、基本的人間関係の良好さをいかに確立するかが重要であるということである。質問紙調査からは、そのために父親が親子関係における独自の役割を果たすことや、家庭内外のコミュニケーション媒体として電子メールも含めた手段を活用す

ることなどについての示唆も得られた。さらに個別の問題解決的でない相談の場としての子育てネットワークの必要性も示唆された。それが柔軟な形で「駆け込み寺」あるいは「シェルター」として、子どもと親と家族を守るものとなるのだと考えられる。そうしたところに、地域に根ざす民間組織や個人の活動を確立する条件は何かということを、今回の面接聞き取り調査の手法を生かしながら考えることが課題である。

他方で、そうなると公的機関はどのような役割を果たしうるかということの解明も、今後の課題となるであろう。

本研究の各調査に協力してくれた回答者は、郵送回答方式としては約半数という高い回答率が得られたとはいえ、調査標本としては子育ての問題に関心の高い層であると考えられる。聞き取り調査も同様であろう。そのことは、質問紙の自由記述回答に親としてのあり方が意見として多々述べられていたことや、聞き取り調査での発言の明確さからもうかがえる。それでも、限られた回答の中から父母の認識や接し方の違いが見いだされ、また相談事情のむずかしさと可能性が見いだされたことは、子育てを担う家庭の問題を知るのには十分なものであった。今後、回答が得にくい対象層まで分け入って探究することにより、今回見いだされた結果を検証することが期待される。

(馬場久志)

引用文献

- 社団法人日本PTA全国協議会 2004 家庭教育におけるテレビメディア調査/青少年とインターネット等に関する調査(日本子ども家庭総合研究所、2005 KTC中央出版より)
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 2004 第2回21世紀出生児縦断調査(14年度)(日本子ども家庭総合研究所 2005 KTC中央出版より)
- 警視庁 2005 いわゆる出会い系サイトに関係した事件の検挙情況について(日本子ども家庭総合

研究所 2006 KTC 中央出版より)
総務省情報通信政策局、2005 通信利用動向(世帯
対象調査)(日本子ども家庭総合研究所 2006
KTC 中央出版より)
雇用職業総合研究所 1987 女子労働の新時代
—キャッチ・アップを超えて 東京大学出版会

謝 辞

本研究は、2005 年度埼玉大学地域との共同研

究プロジェクトとして埼玉大学の研究助成を受け、坂西友秀、馬場久志、原田裕子の 3 名により行われた。

調査に協力して下さった小学校、中学校の保護者と教職員の皆様に厚く感謝申し上げます。

(2006 年 3 月 31 日提出)

(2006 年 4 月 11 日受理)